

ブラジル特報



No.1664
2021年9月号

あの町この町
ペロタス Pelotas



特集 在伯ニッケイ社会を再考する

- ・ 奇妙な時代のブラジルの日系人
- ・ 日系人は混乱を好まないかもしれないが、日系人を怒らせる何かは存在する
- ・ 北伯日系社会について思う事

0円

新規会員募集中!
詳しくは P21 をご覧ください。



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org



37年間
南米一筋

驚き！ 感動！！

魅惑のブラジルへの旅

ブラジルへのご旅行・出張は
創業 1979 年のアルファインテルにお任せください。

アルファインテルは南米系旅行会社で唯一の国際航空運送協会 (IATA) 公認代理店です。

航空会社との直取引につき、料金、座席確保に自信があります。

主要取扱航空会社：ユナイテッド航空、デルタ航空、ルフトハンザドイツ航空、エールフランス航空、エティハド航空、エミレーツ航空、カタール航空、アエロメヒコ航空、タム航空、ラン航空、アルゼンチン航空、ゴル航空、コパ航空、アヴィアンカ航空

アルファインテルはブラジル総領事館（東京、浜松、名古屋）の登録業者です。

観光や短期商用はもちろん、永住権取得や技術支援などの長期ビザもお任せください。

ご旅行・ご出張の際の現地のホテル、ガイド、車輦の手配も実績ある弊社にお任せください。

株式会社アルファインテル
(本社) 東京都港区新橋3-8-6 大新ビル3階

観光庁長官登録旅行業 第1835号
社団法人日本旅行業協会正会員/OTOA正会員
TEL: 03-5473-0541 FAX: 03-5473-0540

アルファインテル e-mail : info@alfainter.co.jp



..... 目次

あの町この町
ペロタス [岸和田仁] 3

ブラジル・ナウ
すでに「世界交代」した日系社会 [深沢正雪] 5

【特集】在伯ニッケイ社会を再考する
奇妙な時代のブラジルの日系人
[保久原 淳次 ジョージ] 6

【特集】在伯ニッケイ社会を再考する
日系人は混乱を好まないかもしれないが、
日系人を怒らせる何かは存在する
[Thais Oyama] 9

【特集】在伯ニッケイ社会を再考する
北伯日系社会について思う事
[堤 剛太] 10

ブラジル現地報告
パンデミック禍でのブラジル訪問 [山田 翔] 12

連載・日系企業シリーズ
(株)ピバピーダメディカルライフ [野口重雄] 13

連載・ビジネス法務の肝
ブラジルにおけるeスポーツ規制～日本法との比較～
[柏 健吾/落合一樹] 14

連載・税務の動どころ
ブラジルにおける税制改正動向
[マルクス・ヴィニシウス・ゴンザレス/三上智大/天野義仁] 15

エッセイ
ブラジルの歯科 (その2) [星淳子] 16

ウーマン・アイ
オリンピックのボランティアしてきました！
[池 聡子] 17

ジャーナリストの旅路
犯罪は国を映す？ [中川千歳] 17

連載・文化評論
保久原ジョージの話題作『星をかぞえる』と沖縄移民史
人種問題を内包した「勝ち負け抗争」を問う
[岸和田仁] 18

最近のブラジル政治経済事情 19

キャンパス・コラム
私はホストファザーが文字を読めないことを知った
[新井竜斗] 19

新刊書紹介 20

連載・ブラジルあれこれ
パウロ・シャーベス (2) 20

協会からのお知らせ 21



写真＝永武ひかる
「表紙のひとこと」
「教室中に歓声が響く。日本人移住地として知られるパラ州トマスーの日系学校。それぞれが写した写真を日本の子供たちと交換、そのポストカードを手に記念撮影。アグロフォレストリーで知られる町の、新しい世代が未来をつむぐ。」
永武ひかる：ブラジル撮影約30年、著作に写真絵本「世界のともだち3 ブラジル」(備成社)等。
www.hikarunphoto.com

あの町、
この町

ペロタス Pelotas

ブラジル最南部に位置するリオグランデ・ド・スール州には魅力的かつ個性的な町がいくつもあるが、住民人口の数では州で三番目の市がペロタスである(現人口は約34万人)。同州の東側を南北に延びるラゴア・ドス・パトス(直訳：アヒルの湖)はブラジル最大のラグーン(汽水潟湖)であるが、その中ほどの湖岸に位置し、住民の平均寿命年数ではブラジ



ルでトップクラスを誇るのがペロタス市である。この町がブラジル経済史に登場するのは、18世紀末から産業化するシャルケ(塩干牛肉)生産の中心地として、である。原料となる牛肉は、パンバ平原で広く行われている放牧場から供給され、肉の加工・処理(屠畜から塩漬け・日干しまで)の労働力は黒人奴隷に依存する手工業的畜産加工業であったが、最盛期の1860年代には、シャルケ処理加工場が40カ所もあったという。年間10万頭以上の牛が処理されていたという一大ビジネスであった。シャルケ製品は、船便でリオやノルデスチへ販売されたが、その帰り便でノルデスチから持ち込まれたのが砂糖であった。



19世紀末からドイツを中心とするヨーロッパ移民が多数ペロタス地方にも入植したことから、彼らが持ち込んだ温帯果物(特に桃)とノルデスチ産砂糖を組み合わせた、砂糖シロップ入り果物缶詰・ピン詰などの農産加工業が発達することになり、これがシャルケ加工業からの産業転換を促進したのであった。ペロタスは、農産加工によって近代化を果たし、経済的にも豊かな町となったのだ。

シャルケによる資本蓄積というブラジル経済史における一特異事例に関心を持って、社会学博士論文(『南部ブラジルの資本主義と奴隷制』初版1962年)を書き上げたのが、後に大統領となる社会学者F・H・カルドーゾであったが、このカルドーゾ元大統領を尊敬して政治家になったというのが、「次の次の大統領候補」と目されるエドゥアルド・レイチ現州知事である。弱冠36歳の若き州知事は、ペロタス市会議員、ペロタス市長を経て、2018年の選挙で州知事に当選している。彼は、自らゲイであるとカミングアウトした、ブラジル史上初めてのLGBT州知事でもある。

経済的にも性の多様性合いでも先進地といえるペロタスは、いわゆる「ブラジルらしさ」とはいささか違った、「もう一つのブラジル」を象徴する町である、と筆者は考えている。



岸和田仁(「ブラジル特報」編集人)

▲パトス潟湖からみたペロタス市

▲19世紀に建てられた旧家の屋敷



ブラジル人スタッフ
募集中!

★Recrutamento de pessoal brasileiro★

仕事内容：車部品の製造・検査

Descrição do trabalho :

Fabricação e inspeção de peças automotivas

勤務場所

福井県越前市池ノ上町
Ikenokamicho, cidade de Echizen, prefeitura de Fukui

勤務時間

8:25-17:20 21:55-6:50 土日休み
8:25-17:20 21:55-6:50 Sábado e domingo feriados

給与

時給1500円
Salário por hora 1.500 ienes

待遇

寮費40,000円/月まで補助有(近隣に寮完備!)
Taxa de dormitório 40.000 ienes / mês com subsídio
(dormitório disponível nas proximidades!)

応募方法

☎0120-104-572 にご連絡ください。

お気軽にお問い合わせください。

Sinta-se à vontade para nos contatar.

株式会社エース

東京都町田市中町1-2-2 森町ビル2B-1
*面接の際は、こちらのチラシをお持ちください。

詳細問い合わせはコチラ▶

LINEで直接やり取りできます



BRASIL NOW

ブラジル・ナウ

すでに、世界交代、した日系社会

10年ほど前、コロニアの文芸関係者から「日本語俳句がなくなってもいいじゃないですか。増田恆河さんが広めたポルトガル語 Haikai (俳諧) がブラジル人に広がっているから」と投げ捨てるように言われ、どこか違う気がした。

「形が残ればいい」という問題ではなく、文芸作品に大事なものは、そこに託されている“想い”ではないかと思う。表現手法のレベルや“想い”の量は変わらなくても、ベクトルが変われば、文芸作品としては根本的な変化となる。

ブラジルにおける日本語文学の意義は、「異国で生涯を終える者だからこそその詩観」「移り住んだ者のサガ」「遠く離れたがゆえの祖国への熱い想い」「異文化の中で送る人生の様々な出来事」が織り込まれていることだと思う。そこに移民文学独自の深みが生まれる。

ポ語作品は主に、日本の文学形式の器を借りて、この地に生を受けた側から当地の折々の出来事を詠い込む発想が中心だ。形は Haikai でも内容的には大きな差がある。

同様のことは日系団体の存在意義、コミュニティペーパーにも言えると思う。「日系社会」には大きく分けて「日本語世界」と「ポ語世界」がある。この二つは、近いようでいて遠く、遠いようでいて近い。

例えてみれば親子関係だ。親の世代の常識と子供の世代のそれは、同じ日本に住んでいても異なる。まして言葉や国籍が違えば、その違いは致命的なほど大きくなることすらある。

「コロニア」は消滅した

1992年から邦字紙記者をしてきた正直な実感としては「コロニア」(日本語世界寄りの日系社会)という言葉は死語になった。百年祭(2008年)頃までコロニアは僅かにあった。今は「コムニダーデ」、地方では「カイカン」と言った方が通りが良い。

当初、圧倒的な存在だった日本語世界はどんどん高齢化して縮小、現在では「薄皮一枚」ではないか。パンデミックのために、コンピューターや携帯・スマホが苦手な一世高齢者は活動に参加できなくなり、日系社会における存在感にトドメを刺した気がする。

だが、かつて一世から押さえつけられた存在だったポ語世界がどんどん拡大し、完全に日系社会の中心になった。パンデミックによって世代交代、いや、世界交代、が一気に進んだ。

先日、1974年渡伯の戦後移民と話していて驚いた。最も若い、最後発世代のはずの彼が70歳を過ぎていたからだ。東京五輪が終わり、高度経済成長してオイルショックになっ

たのを受け、飛行機でやってきた。「同期は30人いたけど残ったのは3人だけ。うち生き残っているのは2人」としみじみ語っていた。

戦後移民5万人の大半は1953年からの10年間で。それ以降は、チョコチョコに過ぎない。その最後の世代が70代を超えたということは、戦後移民の中心層は80~90歳だ。

コロナ禍が終わっても、彼らは活動の最前線には戻れない。自宅に押し込まれた高齢者移民は体力も気力も削がれた。おそらく日本語学校や日系団体の3割近くが活動再開せずに、ひっそりと幕を閉じるのではと恐れている。

同じ演目だが、すでに入れ替わった登場人物

今の日系活動の最前線は70~80歳代の二世だ。日系社会には百年祭以降、質的に根本的な変化が訪れた。言ってみれば、舞台の登場人物は根本的に入れ替わった。入れ替わっても団体は残り、同じ演目(伝統的イベント)を演じ続けている。だが演出手法や使う言語は変化した。

だから日系社会を定点観測するのに邦字紙だけでは分からない時代だ。邦字紙の特性から、常に日本語世界寄りの内容になりがちだ。イベント現場ではポ語しか使われない時代だ。

「日本語世界」から「ポ語世界」に入れ替わるのは「イモムシが蝶になる」ぐらいの変化だと思う。もしかしたら、パンデミック期は“さなぎ”のような期間で、今後、本格的なポ語世界としての日系社会が花咲く可能性がある。

ここで気になるのは《日本語世界で語られて来た“精神”は、どのていどポ語世界に継承されたか》という点だ。いわゆる「日本文化の継承」「日系人としてのルーツ意識」的な部分だ。正直言って一世側としてはかなり悲観している。

四世、五世、六世が増えていくにつれ、今までは「一世が直接伝える日本文化」だったが、これらからは「二世が理解して解釈し直した日系文化」の世界が強まる。戦前には二世ですら郷愁を込めていた日本への眼差しが、感情的な絆が切れた、ただの「独特な興味深い東洋文化」に変わっていく。

つまり、日本語俳句でなく、Haikaiの世界になっている。明らかにベクトルが変わった。

だが、もしも日本側から見て「日系社会は同じように続いている」風に見えるのであれば、案外継承はうまくいっているのかもしれない。だが「継承されている振りが上手」の可能性も高いと密かに感じている。

深沢正雪(ニッケイ新聞編集長)

奇妙な時代のブラジルの日系人



Jorge J. Okubaro
(保久原 淳次 ジョージ)

今は、奇妙な時代だ。私の世代はこのような時代を生きようとは想像したこともなかった。

パンデミックは、多くの制限と新しい日常を我々に課しており、良くも悪くも我々はそれに適応しているが、このパンデミックがいつまで、また、どのくらいの規模で続くのかについて、我々は不信感と不安を感じている。

パンデミックは、以前は専門家の狭い隙間世界での使用に限定されていた語彙を通常の語彙の中に持ち込んだ。その一つが、covid-19の症状を悪化させる疾患の共存を示す comorbidade (合併症) だ。しかしながら医学用語を除けば、もっとも注目に値するのは、ある材料が、それを変形させようとする力をうけた後にこれに抗して元の形状を回復しようとする能力を表す resiliência という言葉だろう。

かなりの頻度で、人類、特にブラジル人は、予期せぬ困難の前に高い能力 (resiliência) を示してきたと言われる。これは真実だ。

このような予期せぬ時代には、他にも驚くような事件が起きる。他の国よりパンデミックの影響が深刻な国において、もう忘れ去られていたと思われる問題が再び顔を出した。それは、突然ブラジルにおける日系人の存在が社会の一部に不快感を与えたという兆候である。おそらくは適切な判断から人種差別について指摘する人々が現れた。

この事件は、covid-19のパンデミック対策に向けた公共政策の

立案と実行に伴う間違い、不作為や犯罪を調査するための上院議員により構成される委員会での女性医療専門家による証言に起因する。

国が分断される中、証言では、新型コロナウイルスの高い感染率と死亡率の責任は大統領にはないとしたことで大統領支持派から高く評価された一方、同じ理由で大統領反対派からは酷評された。ここでは、どちらの主張に理があるかは重要ではない。しかしながら証言者が日系であったことで一部メディアでは、この証言に対するいくつかの批判の中に人種差別的内容が含まれると確認するに至った。**(訳註)** 私の見るところ、このケースは、単発的かつ一時的な影響力を持つにすぎない。私の見立てが正しいことを信じる。

ブラジルの社会、経済、政治、文化への日系人の参加は、一世紀以上にわたって活発だった。日本人とその子孫のブラジルの日常への同化と1908年に最初の移民船笠戸丸で移住者が到着して以来、とりわけ多人数社会であるというブラジルのアイデンティティーの強化に果たしてきたその役割は、日系人のプレゼンスが残した大きな刻印と言える。

他方、確かにそれとは逆の方向を示した事実、研究、政治的決定、法的措置があった。

法学者、社会学者にして著名なブラジル問題の研究者であるフランシスコ・ジョゼ・デ・オリヴェイラ・ヴィアナ (Francisco José de Oliveira Vianna) による総括的評価は、他のどの例より

も的確に20世紀前半におけるインテリ層の日本人移住者に関する考えを示している。

「日本人は、硫黄のようだ：溶けて交わらない (insolúvel)」とフランシスコ・ヴィアナは、1932年に発行されたその著書『人種と同化 (Raca e Assimilacao)』の中で書いた (1938年の第4版、209ページ)。

日本人は、ブラジル社会の形成において不都合な存在だったことを類推させ得るその主張に疑問を残さないため、著者は、次のように追記している。「このことこそが、世界各地で、また、ブラジルにおいても日本人移住の一番の問題点である。」

1930年代は、日本人のプレゼンスに関するフランシスコ・ヴィアナの著書とその主張が頂点に達した時代であった。あの時代も、また、奇妙な時代であった。

国家制度的観点に立てば、このような思考形式が頂点を迎えたのは、1934年憲法に新規移住者数の上限を設ける条項が挿入された時であった。その上限とは、それまでに入国した累計移住者数の2%というものであった。当該措置は、ただ一つの民族のみを標的にしたもので、当時、日本人移住者は、歴史的にも最大の規模でブラジルに入国し続けていた唯一の移住者だった。

1937年のクーデターは、ジェトゥリオ・ヴァルガス (Getúlio Vargas) によるエスタード・ノーヴォ (Estado Novo) の独裁体制を生んだが、その結果、各国移住者の活動を制限する大統領令 (decretos-leis)

(クーデターによって国会が閉鎖される中、法律と同じ効力を持つ法的措置で政府のイニシアティブによってのみ発令、即発効) が相次いで発令された。特にブラジル社会への同化が義務として課された。そして、この言葉「同化

(assimilação)」こそフランシスコ・ヴィアナの著書やヴァルガス独裁政権の移民政策のキー・ワードであった。公的な雑誌に掲載された論文は、移住者の同化を主張し、日本人移住者を非難した。

この少し後にやってくることになる戦争は、ブラジルと日本を敵と味方に分けたが、移住者、とりわけ日本人移住者の活動の統制といくつかの地域における、あからさまな政治的弾圧は激しさを増した。外国語による書籍、新聞やその他の出版物は禁止された。日本語学校は閉鎖されたが、一部学校の閉鎖は警察力によるものだった。公共の場における外国語による会話も禁止された。

このような不信感と情報不足が支配する環境下で、ナショナリスティックな思考が生まれたが、そのような思考の強さとその到達範囲は、多くの日本人移住者にとっては信頼できる情報の量に反比例した。戦時中及び特に世界大戦終結直後においては、狂信とも言えるある価値観への盲目的信念とナショナリズムが、正確な情報に取って代わった。

過激な運動がコミュニティーにおいて組織されると瞬間に広い地域に広がった。

日本の勝利を信じる諸グループは、本当の戦争の結果を知る人々を迫害し、ある者は、殺害するようになった。このような、いまなお日系社会を悩ませているように見える内部抗争が



◀ Jorge J Okubaro 著「O súdito」
(日本語版「星をかぞえる」)

展開されていたまさにその時、1946年に制憲議会が召集された。この制憲議会では、前年にエ

スタード・ノヴォの独裁制が瓦解し、民主化の道を歩み始めた共和国の基礎を確立することになっていた。

人の議員の提案による憲法改正案は、非常に簡潔な文面ながら、重大な結果をもたらすものであった。提案を行った議員のうちの一人は、ミゲル・コウト・フィーリョ (Miguel Couto Filho) という議員で、1934年制憲議会において入国日本人移住者数に上限を課すことに尽力した議員の子息であった。改正案は、「年齢とその出身にかかわらず、すべての日本人の入国を禁ずる」というものであった。この改正案が採決にかけられたところ、賛成99票、反対99票の同票であったが、制憲議会議長のフェルナンド・デ・メロ・ヴィアナ (Fernando de Melo Viana) 下院議員の決定票により否決された。

この投票は、ブラジルにおける日本人のプレゼンスを拒否するとその国家制度的、政治的、知的プロセスの絶頂であり、また同時にその凋落の始まりでもあった。それは、日系人とブラジル人の新たな関係性を表す記念碑と解すことができるかもしれない。

終戦と1951年のサンフランシスコ講和条約締結によるブラジルと日本の外交関係再開、1952年のブラジル日本人移住の再開、1954年のサンパウロ市創立400周年記念行事への日系社会の参加と同じ年の日本ブラジル文化福祉協会 (現在の名称)「文

協」の設立、翌年のブラジル日本文化連盟の設立、これらの出来事は、日系人とブラジル社会の新たな関係のシンボルと化した。

これからも、常にあちこちで反日本人という人種差別的兆候が見られたり、その表明が行われるであろう。私が信じ、引き続きそうであって欲しいと願う自由な社会、そしてブラジルのような民族的な多様性に富む社会においては、こういう出来事は避けて通れないと思う。しかしながら、このような反応が、現在も予測可能な未来においても、我々がこれまで歩んできた軌跡を変えてしまうような力は持たないと私には思える。つまりところ我々は「resiliência」という能力を持っているのではなかったか？

2008年のブラジル日本人移住100周年記念事業は、徳仁皇太子殿下 (当時) のご臨席をいただき実施されたが、日系社会とブラジル社会の関係のこの新しいフェーズの門出を祝福するものとなった。これから将来に向け、途中で新たな小さな仲違いが起きるかもしれないが、この新しい関係は持続し、変貌を遂げながら将来の日系世代に引き継がれるだろう。この奇妙な時代を乗り越えれば、それらはあくまで小さな仲たがいに過ぎないのだから。(原文ポルトガル語、編集部訳)

編集部註：
保久原淳次ジョージは、1946年サンパウロ州アラウカアラ生まれの沖繩系二世、6人兄弟の末っ子。サンパウロ大学の工学部 (工学部とコミュニケーション学部) を卒業したことから、科学記事も政治・社会記事も自在に書けるジャーナリストとして活躍、新聞 (フォーリャ・ダ・タルジ、ジョルナル・ド・ブラジル) や雑誌 (ヴィザウン、ヴェージャ) を経て、長年にわたりオ・エスタド・デ・サンパウロ紙の論説委員を務めた。またサンパウロ州政府の報道編集顧問も委嘱されるなど、知名度も高い。財界人の評伝から自動車効用論まで著書も多数あり、日系社会でも話題になった自伝的作品『星をかぞえる』(初版2008年) については、弊誌P18文化評論で紹介している。

訳註：6月1日の上院CPI(議会調査委員会)において、日系医師ニーゼ・ヤマグチが証言した「事件」。マラリア特効薬クロロキナーナがコロナ治療にも有効とするボルソナーロ大統領の立場を積極支援した医師であったため、彼女の科学基礎知識の欠如が問われることになり、さらに彼女の現政権寄りの政治的行動がCPIメンバー議員によって強烈に批判された。また、彼女の話し方の「不遜な態度」が、更なる反発を醸成し、議員たちから糾弾に近い厳しい発言が続いた。ここに人種差別的要素が見られたといえる。

日系人は混乱を好まないかもしれないが、日系人を怒らせる何かは存在する

ボルソナーロ： 粗野な言動を繰り返す 大統領

ジャイル・ボルソナーロがブラジル大統領に就任したあの悲しい日以来、彼は幾度となく日系人に対する粗野な言動を繰り返してきた。東洋人の容貌に似せるため自分の両目を指で横に引っ張って見せるジェスチャーや日本人や日本に対する悪ふざけの発言（「日本ではすべてがミニチュア」）は、2019年1月の就任以降4ヶ月でニュースとして報道され始めた。

ブラジルのもっとも影響力のある新聞の一つであるフォーリャ・デ・サンパウロ（Folha de S. Paulo）紙は、この問題を報道した新聞の一つであった。同年5月28日付同紙は、日系社会を代表する人たちに日本人とその子弟に関する大統領の発言をどう思うかインタビューしている。元連邦下院議員、元陸軍大尉である大統領の発言を「腹立たしく（revoltante）思う。」と評したニッケイ新聞社主のラウル・タカキ氏を除くすべての人があまり大騒ぎしない対応を選んだ。

日本ブラジル文化福祉協会のレナト・イシカワ（Renato Ishikawa）会長は、大統領の発言にはせいぜい「笑い声（sonora risada）」で答えればよいとの言い方を選んだ。同会長は、併せて、「大統領は言いたいことを言うことができる。大統領の発言にあまり重きを置くべきではない。許して笑い飛ばせばいい。」

2017年には黒人・キロンボ運動に参加する国会議員と運動の代表者は、当時連邦下院議員であったボルソナー

ロを彼らのコミュニティに對する侮辱的と思われる発言により裁判所に訴えた。

しかしながら、日本人の場合は、大統領の発言が、訴訟の提起や個人または団体による公式な抗議に発展したことはなかった。

当時日系社会が沈黙したり無関心でいたことは、私には、自然で、ごく賢明な反応に思えた。サンパウロ州の地方で生まれた三世として、私は、日本人とその子孫である我々は、混乱やましてその中心にいることは好きではなく、混乱が起きた際には、湯の沸騰を抑えて、それ以上火をかき混ぜないことが最善だと信じるよう教育されてきた。

拙著『Tormenta』への 対応に思う

それで『Tormenta（嵐の日々）：ボルソナーロ政権 危機、陰謀、秘密』という本を出版した後の2020年1月に大統領が私を「この日本人（essa japonesa）」と呼び、私がブラジルで何をしているのか承知していないと述べた際、このような考え方に従って行動したのである。大統領は、「これは、この日本人の著書だ。自分は、この日本人がブラジルで何をしているのかは承知していないが、今回反政府的なことをした。」と述べたのである。

当時私にコンタクトしてきたジャーナリストの皆さんには、私が大統領の発言を喜ばしく感じている旨表明した。

私がそのように表明したのは、ある時イタリアのテレビ局のインタビューに対してマーガレット・サッチャー英

首相（当時）が答えた内容を思い出したからだ。

記者が、どのような質問が彼女を最も怒らせるかと聞いたことに對し、サッチャー首相は、職業柄あらゆる批判を受ける準備はできているが、その批判が個人的性格を帯びているときは、とても喜んだものだと言ったのである。

その理由についてサッチャー首相は、ある人が個人的攻撃を利用するということは、彼女にとってはその人は提示すべき政治的な議論を持ち合わせていないということを示しているからだと断言した。

そしてそれは、私のケースにも当てはまった。ボルソナーロ大統領が私を貶める（desqualificar）ために民族を出汁にした間違った議論に訴えることを余儀なくされていたとすれば、それは、大統領が、私の著書の中になかなる欠陥や間違いも見い出せなかったことを意味することになり、私にとっては、むしろ称賛にあたるものであった。

私は、このコメントのみを発出し、「日本人」に言及した部分には触れなかった。それには二つの理由があった。一つ目の理由は、ボルソナーロ大統領は、戦略的な計算に基づいてあの発言をしたと解ったからだ。

『Tormenta』を書くために一年間にわたりボルソナーロ大統領と政府関係者に対するインタビューや調査に専念してきたが、ボルソナーロ大統領は、かなりの知的限界を有しているとはいえ、日本人とブラジル生まれの日本人の子弟（私のケース）の違いが解らな



Thais Oyama

『Tormenta（嵐の日々）：ボルソナーロ政権 危機、陰謀、秘密』▶

いほどではないと私は断言できる。

ボルソナーロが私のことを「日本人」と呼んだのは、気に入らなかった本の著者の私が、「外国人」で、したがってブラジルのことをろくに知らないうで、ただ「反政府」的行動に関心があったということを示唆したかったからだ。ボルソナーロは、それが真実でないことは知っていた。それゆえ私は、彼の詭弁を無視したのだ。

二番目に大統領の発言内容についてこれ以上プレイアップしないと判断に至った理由は、日系社会を混乱の中心に置くことを避けたいと思ったからであった。ボルソナーロの発言に「感謝」した時、この件に終止符を打ち、これ以上火に薪をくべないつもりであった。

改めて、自分自身の判断を 問い直す

今日、私は、あの時の自分の判断が正しかったのかについて疑問に感じている。

というのもボルソナーロが日本人の特徴、その身体的特徴をからかおうとする発言を行った際にみられた2019年5月の反応とは違う反応が日系社会の一部から出てきたことに驚いたからだ。

前回は報道機関が日系社会の代表たちの反応をインタビューした結果として出てきた数少なくかつ穏やかな反応が報道された。

今回は、しかしながら、法学者のキヨシ・ハラダ（Kiyoshi Harada）教授のコメントのように自発的でより憤然とした反応が見られた。

ハラダ教授は、Nippak紙（Jornal Nippak）（訳註：ニッケイ新聞ポルトガル語版）に掲載された記事の中で「大統領の非礼なコメントは、日系社会全

体を怒らせた。」と書いた。同教授は、日系社会は、「人間活動のすべての分野で熱意と能力を持って行動し、国家の知能の開発と強化に貢献してきた。」と述べた。

Nippak紙の同じ号で作家のアンドレ・コンドウは、彼や多くの日系人にとって「日本人（japonês）と呼ばれることは大変名誉なことだ。」と書いている。

この作家は、しかしながら、ボルソナーロの後段の発言には憤りを感じると付け加えている。すなわち彼の理解によれば、ボルソナーロは、日系人がほかのどのような人とも同様に「ブラジル人である権利や大方の我々がブラジルを愛するようにこの国を愛する権利」に疑問を挟んだのである。

今回の日系社会を構成する人たちの発言は、より痛烈なものに思えるが、他方、それは前回同様少ない数のままで。しかしながら、私の個人的付き合いの中では、前年（2019年）5月の反応とは逆に、日系人は、公共の場では黙っていることを望みつつ私的な場では、本当に立腹していた。私にはその理由がわかる気がする。

多くの日系人は、ブラジル人であることに誇りを持つ一方で、同じくらい自分のルーツに誇りを持っている。それは、日本の文化や国家について誇りに思うのみならず、多くのブラジル生まれの日系人は、子供のころに父母に聞いた思い出や祖父母が語った物語などを通じて日本に對し愛情を持っているからである。

彼らは、祖先の人たちが、見知らぬ土地に入植し、未知の言葉を習い、奇妙な食べ物や理解できない風習に慣れることがいかに大変なことだったかを知っている。

ブラジル生まれの日本人の子弟は、愛する祖国を離れ見知らぬ土地を祖国

とするこ
とは、犠
牲、努力
そして勇
気を必要
とするこ
とを学ん
だ。それ
は、彼ら

の父母、祖父母、曾祖父母が、子弟がここで生まれ、育ち、彼らより良い生活を手に入れるために経験しなければならなかったことである。

ボルソナーロは、彼自身イタリア移民のひ孫世代にあたるが、その不幸な発言によって、日系ブラジル人たちのこのデリケートな心と精神における愛情のつながりを無視したのである。

そして私はといえば、日系人は混乱を望まないかもしれないが、ブラジルを愛し、日本を誇りに思っているということ、また、それを無視することは、細い目をからかうことよりはるかに深刻な失言であることが解った。（原文ポルトガル語、編集部訳）

編集部註：
Thais Oyama（タイス大山）は、1966年サンパウロ州モジ・ダス・クルーゼス生まれの日系三世、4人姉弟の長女。父方の祖父母の出身地は秋田と長野で、母方の祖父母の出身地は岐阜と兵庫の由。PUC（カトリック大学）卒業後、フォーリャ・デ・サンパウロ紙に入社し、ジャーナリスト活動を開始。その後、オ・エスタード紙やグローボTVを経て、総合週刊誌ヴェージャに18年務め、長年に亘って同誌編集長として活躍した。国内記事はもとより、ホンジュラス、イラン、アフガニスタン、中国、北朝鮮などの海外取材経験も豊富。中国特集記事は躍進中の中国の「光と影」を深読みしたと経済界でも話題になり、2011年東日本大震災の時は、長期取材で復興に立ち向かう東北の人達の姿を写真した記事群は読者の感動を巻き起こした。
軍政時代の言論弾圧・政治犯の拷問を礼賛するボルソナーロ大統領に疑問を持ったことから、徹底取材を進めることになったが、この政権1年目の日々を詳しく記録したのが、2020年1月に刊行されたノンフィクション作品『Tormenta（嵐の日々）』である。この話題作はベストセラーとなったが、大統領の逆鱗に触れたことから、彼から人種差別的な発言も飛び出したことは上述の通りである。
ちなみに彼女は空手（松濤館流）の有段者（黒帯）である。



北伯日系社会について 思う事

日本人がアマゾン地方の日系社会に対して抱いているイメージには、どんなものがあるのだろうか。例えば、「農業者がまだ中心の社会で、日系人は開拓者精神に富んでいる・・・それから、明治は無理としても昭和レトロの社会が存在している」はて、こんな感じだろうか。

実際の北伯の日系人は、20年以上前からNHK衛星テレビ放送が視聴できるようになり、インターネットも随分前から一般家庭に普及しており今では、世界中の情報がリアルタイムで入手できる、そんな日常生活を送っているのである。年に1、2度の日本の映画上映や、演芸大会に歓声の声を上げていた当時を想うと今昔の感である。この機会に、紙面をお借りしあまり知られていない、当地日系社会の現状や課題などを少々お伝えしてみたい。

2019年9月、当地方ではアマゾン日本人移住90周年の祭典が催された。筆者の地元ベレン、トメアスーそれに隣州マナウスの3つの地域で式典並びにイベントが行われた。パンデミアのおきる前年で、まさか翌年からこんなとんでもない事態が発生し長期化するとは夢にも思わなかったが。

日本の国土の10数倍を有する、広大な面積の北伯地方に日系人は推定で約8万人以上が居住している。これら日系人の原点が、90年前の移民に始まるのである。戦前、戦後併せて約10万人の日本人移民が、北伯地方へと渡ってきた。

戦前の移住者で、現在生存されておられる方は当然90歳以上、戦後の1950年代に入植された方でも80代以上となるだろう。要するに、8万人を数える北伯日系社会での一世代は約3千人と、

一握りの超高齢者達が残っているだけである。なお、トメアスー移住地には、第一回日本人アマゾン移民の山田元さん(94歳)が、唯一現存されている。

アマゾンの森林を、斧一丁で開拓し農業で家族の生活を支えて来たこれら一世と違い、次の世代である二世、三世になると町での高等教育を受け、そのまま就職移住地へは戻らないケースがほとんどである。

この為に、彼らの職業は実に多様化している。医師、弁護士、会計士、歯科医、商業、教員、公務員などは定番の就職先であるが、最近ではメディア、IT関係も増えてきている。また、かつては日系人に向いていないと言われた政治の分野や、警察関係の職業に就く人も見られる。昨年行われたベレン市長選に立候補した日系候補は、連邦警察の幹部であった。当選していれば、苦手だった二つの職業を一人でこなす事になる筈だったのだが、しかし、落選したとはいえ本命のベレン政治家を脅かすほど僅差での結果だったので恐らく、次の国政選挙にでも出馬すれば北伯地方初の日系下議誕生には大きな期待があらう。

若い人達のほとんどが、都会に住むようになったとは言え親が培った農業を受け継ぐ者がまったく居なくなった訳ではないのだ。移住地に戻り、新しい知識と感覚で農業に挑んでいる頼もしい後継者達も存在している。日本人移住発祥の地トメアスーで実践されている、農業と林業を組み合わせた新農法アグロフォレストリーや、農産加工工場運営、輸出産品の開発などで不安定な農業政策に、活路を見出している例もある。また、トメアスーではカカオ豆の産地認証を、2019年1月ブラジル知的財産庁(INPI)より受けている。カカオ豆としては、ブラジル国内でバイアー州に次ぎ2番目

の快挙で有った。これは、JICA・東京農工大学が森林農法普及認証プロジェクトの一環として着手していたもので、トメアスー農業者の、実績と熱意とが実を結んだ結果であろう。

ところで、本年5月に入り大変残念な出来事が起きた。日系組織の一つで、日本語教育を長年支えて来た「北伯日本語普及センター」が、突然閉鎖してしまったのである。直接の原因は、慢性的な資金不足から組織運営がこれ以上立ち行かなくなってしまったのだが、コロナ禍がこの閉鎖に拍車をかけたのは事実である。今回の、北伯日本語普及センターの撤退問題は実は、当地日系社会の各団体が抱えている共通の火種であり、けっして対岸の火事ではなかったのだ。第二の普及センターが、いつ現れてもおかしくない状況下に置かれているとも言えよう。

日本人移住者は、移住地内に必ずと言ってよいほど日本人会と日本語学校を設けてきた。こうして、移住者間の相互扶助や結束を深め、子弟教育にも力を入れていたのだ。ベネズエラやペルー、ポリビア等の国々と国境を接し、日本の16倍ほどの面積を持つアマゾン地方全域に戦前戦後と、日本人移住者が次々に送り込まれてきた。そして、これら遠隔地にできた移住地は他の移住地と連携を図る手段もなく、それぞれが孤立化していたのである。

やがて、隔離された様なこれらの移住地を束ねる組織の必要性から、パラ州ベレン市内に連合体的本部組織の「汎アマゾン日伯協会」が、1958年に誕生し日系社会を統一化している。その後、医療衛生・福祉部門が枝分かれするように「アマゾン日伯看護協会」が生まれ、この他、時代と共に婦人会、日系商工会



堤 剛太
(汎アマゾン日伯協会副会長
ベレン在住)

日本文化の催しに
集まってくるベレン市民



議所、老人会、県人会等の各団体が次々に組織化されたのである。

日本語学校や教師のサポート。日本語普及、日本語教材の開発を目的とした北伯日本語普及センターは、1992年に設立されている(その前身北伯日本語普及研究会は1977年から)。普及センター設立時の日本語学習者数は、1千3百名で日本語学校は25校を数えていたのである。移住地を去る一家や、日本語教育に関心を持たない世代が増えてきた事などで、日本語学校の灯が移住地から一つ一つ消えて行き現在、僅か6校しか存在していない。日本語教師を対象とする普及センターの会員数も、75名から15名へと減少してしまったのである。これでは、運営が立ち行かなくなる訳である。

日系社会の組織は、一世移住者がその時代時代のニーズに応じて設けてきたものである。先に記した、次世代層の職業が多様化するとともに、日系社会全体の意識も同じように多様化しているのが現状である。極端に言えば、農業者が100%を占めていた時代の日系社会と今とは、180度程も生活様式、社会環境や日系人の意識が違っていると云ってもよい。そして現在、ほとんどの日系団体が抱えている問題が、会員の減少や財政面の脆弱さといえようか。組織を継続し会員を繋ぎとめるには、一世が会の趣旨としてきた親睦や相互扶助からもう一歩踏み込み、団体の目的を具体的に明確に打ち出さなければならないのである。名称だけ、日伯協会や文化協会に変更しただけでなく実質的な、日本人会からの脱皮である。

最近の人はすぐに「会に入って何のメリットが自分にあるのか?」と、

会の役員に聞いてくる。そこで「何と現金な奴だろう、物事をもっと大所高所から考えて見ろ」と、嘆き反発するようでは、会員離れに拍車をかけるだけである。この素朴な要求に応え、具体的なメリットを提供する事で入会者を増やし、団体を支えてもらわなければならない。会員離れは、都会地のみでなく地方移住地内の日系人すら、地元の団体に入会しない人が増えてきていると言う時代なのだ。

合従連衡という言葉があるが、その時々状況に応じて組織の吸収合併も日系社会はこの先、視野に入れて行かねばならないだろう。体力のある組織が、弱体化した組織を吸収合併する事で、事業を引き継いで行く。例えば、今回普及センターが消えたからと言って、北伯日系社会から日本語教育事業を根絶させる訳には行かない。そこで、日系社会の上部組織である日伯協会(汎アマゾン日伯協会)が、いずれこの事業を肩代わりする事になるだろう。

とは言え、頼みの綱の日伯協会自体もこのパンデミア下で、一年以上もの事業停止を食らい収入の道が絶たれた状態にある。もし、ここで日伯協会が普及センターと同じ運命を辿る様な事にでもなれば、日系社会は戦後の移住地の様にそれぞれの地域が孤立化して行く事だろう。それは、北伯日系社会の弱体化、衰退化の始まりでもある。今回のコロナ禍は、脆弱な基盤の上に積み上げられていた日

系組織に大きな痛手を負わせている。

この困難な時期にも関わらず、唯一存在感を示している組織が日系のアマゾン病院であろうか。いち早く、コロナ患者の受け入れ体制を整え入院患者に対し、手厚い治療と看護を施すことで、アマゾン病院に対する市民の信頼度を高める事に成功している。反面、一般患者の受付を制限した事で現時点では、経営的に逼迫したものがあろう。アマゾン病院のスタートは、ポ語で病状を説明することが出来ず、医療費の支払いにも困窮する初期の日本人移住者への援護対策事業として、1962年から活動が開始されている。

年々減少して行く一世移住者を見据えて、早い時期からブラジル人を顧客対象とする総合病院(現在33科目)へとかじ取りを行ってきた、JICA等が最新医療器材の寄贈を行うなど、適宜支援を行っている事から日系組織としては今の所、安定した路線を走っていると言えよう。

北伯日系社会の概要を紹介してきたが、今回のコロナ騒動での困惑からついそちらへ筆が滑ってしまった。冒頭に書いた「日系人は開拓者精神に富んでいる」その通りである。北伯日系社会は、Pioneer Spiritを発揮し必ずや、この難局を乗り越えて行く事であろう。

パンデミック禍での ブラジル訪問

山田 翔
(協会個人会員)



ブラジル永住権を所有している日本人ならではの共通の悩みがある。それは“2年縛りルール”だ。所有者は2年に一度ブラジルに出国しなければならず、最後の滞在から2年が経過すると永住権は自動的に失効となる。そのため隔年でブラジルに行かなければならない。筆者のブラジルデビューは2009年になる。当時21歳でブラジル連邦大学に留学した。その後、同大学農学部で修士号を取得し、現地の企業で3年間働いた。日本に帰国する2016年までの7年間ブラジルライフを満喫した。現在は日系企業で働いており、ブラジルとは疎遠となってしまったが、“2年縛りルール”のおかげでブラジルとの縁は続いている。

2020年2月に国内でパンデミックが懸念されはじめ、瞬く間に世界へと広がり、ブラジルも例外ではなかった。その最中、“2年縛りルール”がやってきた。当時ブラジルは世界第二位の感染国となり、ボルソナーロ大統領が「コロナは風邪だ」と発言し、感染対策には消極的であったが、永住権の失効を避けるべくブラジル訪問を決意した。

パンデミック禍でのブラジル訪問、14日間の隔離を回避すべく、まず経路を調べた。するとドイツ経由が唯一往路も復路も隔離なしで行けることが判明した。次に出国日前日のPCR検査だ。ドイツでは入国の48時間以内、ブラジルでは72時間以内の陰性証明書の提示が必要である。

そして出国日当日の2021年4月末日、ブラジルはパンデミックで大混乱、日本は緊急事態宣言真っ只中の旅が始まった。羽田空港に到着すると一部の免税店とキオスクを除いて多くのショップが営業していなかった。経路地のフランクフルトも閑散としており、ショップはほとんど開いていない。その後12時間フライトを経てサンパウロに到着した。パンデミックの影響もあり殺伐とした雰囲気を感じていたが、以外にもあっさりしている。その後ブラジル行き便に乗り換え、自宅出発から50時間の長旅が終わった。

滞在先のホテルでは、ビュッフェも屋外プールもサウナもやっておらず、町も閑散としていたが、感染対策はばっちりであった。ボンジアス・カルやロージャ・アメリカーナなどのスーパーでも入場制限、アルコール消毒、入り口での検温、エンボスの使用義務、従業員のマスク着用など日本より徹底されているという印象であった。当時日本ではPCR検査がやっと民間機関で受けられるようになったが、ブラジルではすでに高齢者へのワクチン接種が後半に差し掛かっていた。日本に比べるとブラジルについて限られた情報しか入ってこず、ブラジルは危険とばかり思っていた。だが実際に訪れてみるとブラジルの方がはるかに危機感が強く、対策やワクチン接種などの動きも早い、日本よりも信用できるという印象であった。

今回はパンデミックの影響により3日間の滞在であった。最終日、復路に必要なPCR検査を受けに行った。経路地の

ドイツで入国48時間以内、日本で72時間以内の陰性証明書の提示がそれぞれ必要であった。無事に陰性であったため、ここから帰路の旅が始まった。ブラジルからサンパウロへ移動し、フランクフルト行き便に搭乗した。その後乗り換え30時間のフライトを終え羽田に到着した。普段ならここで安堵するところだが、ここからが大変だった。到着するとまず待合室へ移動し、30分ほど待たされる。次に別室へ移動し、PCR検査を受け、空港職員とのインタビュー及びアプリのインストールを要求された。印象的だったのが、空港職員の大半は学生バイトや外国人実習生ばかりで厚労省の職員が全く。ここで厚労省の問題アプリ「COCOA」と「LOCATOR」、SNSアプリの「SKYPE」や「Whatapp」のインストールが必要な訳だが、いずれも日本では馴染みがなく、「なぜLINEでないのだ」と突っ込みを入れたいくなる。その後PCR検査の結果を2時間ほど待った。乗客の疲労と苛立ちはピークであり、殺伐とした状況の中、やっと入国手続きを終えた。その後、ロビーでさらに1時間ほど待たされた。ここで隔離先のホテル行きバスに乗り換える。実際にはアパホテル両国タワーが隔離先となり、ここで最低3日間軟禁される。ホテル到着後もチェックインに1時間ほどかかり、入室できたのは羽田到着から8時間後であった。隔離中の3日間は毎日3食仕出し弁当で、日本人の筆者でさえ同じような食事に苦労した。そして3日目の朝にPCR検査を受け結果を待つ。ここで陰性なら解放、万が一陽性ならもう3日間の隔離延長戦が待っている。陰性の結果が通知されたのは夕方16時、アパホテルより再び羽田へと連行され解放された。残念なのは、この一連の流れを誰も説明してくれない、というより空港職員誰も把握していないことだった。

さて、昨今のニュースを見ていると要人や五輪関係者の隔離免除や行動制限解除など優遇されている。軟禁地獄を味わった筆者からすると、感染対策への不安もさることながら、政治不信、五輪への関心低下などマイナス感情しか出てこなかった。それでも“2年縛りルール”との闘いは続いていく。次は2023年、今回の経験を是非活かせればと思う。



(株)ビバビーダメディカルライフ とブラジル

野口重雄
(株)ビバビーダメディカルライフ
代表取締役



外国人向け保険会社の創業

Viva Vida! ブラジル特報の読者の皆様であればこの意味はお判りと思う。

2009年3月に共済から保険会社に移行する際に、当時のブラジル人スタッフらと社名を考え、その言葉の意味も含め日本ではちょっとユニークなネーミングにした。

弊社は日本で唯一の外国人向け保険会社である。「少額短期保険会社」とは生命保険、損害保険の会社と同様に保険業法の下、金融庁から「認可」を受けた保険会社である。

現在は外国人技能実習生や留学生等の外国人向け保険に加え、LCI保険シリーズとして保障内容を厳選し保険料を抑えたリーズナブルな保険を日本のマーケットに向けて販売している。

創業は1998年12月、当時のブラジルを中心とした「デカセギ」の皆さんを対象とした医療、生命の共済事業からスタートした。当時多数の日系人が来日していたが、多くの日系人は社会保険や国民健康保険に加入しない為、医療費の未払いや健康保険証の使い回しが多発し、日系人の集住地域を中心に問題意識が高まった時期で、各地域の国保の収支が大幅に悪化し、外国人の国保加入を受け入れない自治体や、外国人お断りの病院も増えていた。

彼らから見て公的保険の保険料は高額で、将来受け取れない年金や介護の保険料負担があることが大きな要因だったが、医療制度も異なり保険に対する認識が日本人と違うこともある。将来使うかどうか分からないものに、お金を払うなどは考えられない事で、今でも多くの外国人はそうした感覚だと思う。保険とは社会と経済の安定の上に成立するものである。

とはいえ、生身の人間なので病気や怪我は充分想定範囲である。彼らが加入しやすい保険がないか、何かセーフティーネットが出来ないか、との相談が大東京火災海上保険で営業を担当していた私に複数の取引先企業、団体から寄せられ、検討の結果20年務めた会社を退社し共済会を立ち上げた。

その後、紆余曲折を経て3年程で契約数も1万件を超え、運営も軌道に乗ってきたので更なる業績向上を目指し、サンパウロでの広報・営業活動を開始した。

サンパウロでの貴重な経験

何の縁も伝手もないサンパウロだったが、日本では(株)アルファインテル佐藤社長、(株)ジェイインテル吉村社長、海外日系人協会岡野事務局長からのアドバイスを戴き、多くの現地日系社会の皆様とのお縁を得て何とか営業活動を行うことができた。

その営業対象は主に現地の送り出し機関や旅行社等だったが、活動の中で多くの方々と接し、お世話を頂いたことは大変

貴重な人生の糧であり大切な思い出だ。

特にニッケイ新聞社の高木ハウル社主、保険業の有馬庄英様には文字通り格別のご高配を賜りブラジルの様々な面を教えて頂いた。

また当時文協(ブラジル日本文化福祉協会)の上原会長や日系人初の陸軍少将となられた小原少将にもご面識を頂戴し、小泉首相訪伯時の文化協会前庭の整備やヴァリウリョス国際空港の日系移民100周年記念碑設置にも若干のご協力が出来たことで、文協の小泉首相揮毫の石碑と空港記念碑には社名と個人名を刻んで頂いている。その上有難いことに文協の庭は「JARDIM VIVAVIDA!」(ビバビーダの庭園)と命名された。

そうした中「日系人に対する健康保険での支援活動が顕著である」との事で、2012年2月6日に日伯文化協会の講堂で、畏れ多くも昭和天皇の従弟であらせられる多羅間殿下ご臨席の下、文協上原会長、飯星下院議員始め多くの皆様のご参集を戴き、救仁郷下院議員よりグランクラス勲章を拝受した。正に身に余る大変名誉な事と感謝する次第である。

残念ながらリーマンショック以降状況が激変しサンパウロ事務所は閉鎖したが、コロナ禍で行き来が難しい今でも、現地とは折衝電話やメールで近況を語り合っている。

さて、サンパウロ事務所開設当初に大変印象深かった話がある。あるパーティーである日系の方から声をかけられた。「野口さんはブラジルの経験はあまりないですね。ブラジルについてお話ししておきたいことがあります。」

私は日系三世で小さい時から祖父や父から「お前は日本人だ。日本人は約束を守れ、時間は正確にしろ、嘘はつくな」等と教えられてきました。私もそう努めてきましたが、今は事業も成功しています。でも野口さん、もしそうでなかったらどうだったでしょう？」

私は「それなら今の成功はないのでしょうか。正にジャポネス・ギャランチードですね。」と応えたが、答えは「いいえ、そうでなければもっとうまくいっていたでしょう。それがブラジルです。」

厳しい現実が多いが、ブラジルがあつて今の当社と私があると感謝している。

親しい知人も多くサウダージを感じる。Muita Saudade!



ブラジルにおけるeスポーツ規制 ～日本法との比較～



柏 健吾
(TMI 総合法律事務所日本法弁護士
現在ブラジルで勤務)



落合一樹
(TMI 総合法律事務所
日本法弁護士)

1. はじめに

Electronic Sportsの略称である「eスポーツ」は、コンピューターゲーム(ビデオゲーム)を使用して行う競技である。ブラジルにおけるeスポーツの人気は非常に高く、現在では世界で3番目のeスポーツファンを抱えていると言われている。今後eスポーツ事業は益々拡大していくことが予想される。そこで、本稿では、ブラジルにおけるeスポーツに関する規制の主要な点を、日本の法規制と比較しながら紹介する。

2.eスポーツ大会に 選手として参加することについての法規制

(1) 日本における規制

日本は刑法において賭博行為を禁止している。一般的に、「賭博」とは、偶然の勝敗により財物や財産上の利益の得喪を争う行為と言われている。「偶然の勝敗」に関して日本の判例は、偶然性が多少でも認められれば、「偶然の勝敗」にあたるとしている。そのため、日本においては、参加費が徴収される(参加費が賞金の原資となる)eスポーツ大会に参加すると、参加選手に賭博罪が成立する可能性が高い(自分のお金を賭けて賞金を得るため)、一般的に、参加費を徴収する形の大会はほとんどない。

(2) ブラジルにおける規制

ブラジルにおいても賭博行為は禁止されているものの、賭博行為に該当するためには、「勝敗が専ら又は主に運に左右されること」が必要になる。「専ら又は主に運に左右される」という文言からは、偶然性が多少でも認められれば賭博に該当する日本よりも賭博になりにくいと考えられるが、賞金付きのeスポーツ大会に参加すること自体の賭博該当性についてはほとんど議論されていない。なお、ポーカーについては、勝敗が専ら又は主に運に左右されないスキルゲームとして適法とする見解がある。

3.eスポーツ大会を 主催することについての法規制

(1) 日本における規制

日本において、eスポーツ大会を主催する際に留意しなければならない主な法令は以下のとおりである。

日本の法規制	
刑法	大会への参加が賭博行為に該当する場合、大会主催者には賭博場開帳罪が成立し得る。
風俗営業法	会場にゲーム機等の遊技設備(通信可能なPC等の汎用性のある機器を除く。)を設置する場合、ゲームセンター営業に該当するとして、営業許可を受ける必要がある。また、賞品の提供が禁止されるため、賞金付き大会の開催は行うことができない。
景品表示法	ゲーム会社が、自社のゲームを用いた大会に賞金を提出する際に、大会賞金に上限が課せられる可能性がある。
著作権法	ゲームやゲーム機を利用した大会を開催する場合、当該ゲームやゲーム機の知的財産権を有するゲーム会社から許諾を得る必要がある。

(2) ブラジルにおける規制

ブラジルにおいては、現時点において、eスポーツ大会を主催すること自体に関する規制はない。ただし、日本と同様に著作権者の同意なくゲーム等を使用すると著作権法に違反する。なお、日本のようにゲーム会社による賞金拠出に関する規制がないこともあってか、ゲームの販売元が公式大会を開催する事例が多く、著作権法上の問題が生じることは多くない。

4. ベッティング(第三者による賭博)に 関する法規制について

(1) 日本における規制

日本においては、サッカーのtotoや競馬など法律上特別に認められている場合を除きベッティングは違法となる。eスポーツを対象とするベッティングは法律上認められていないため違法となる。

(2) ブラジルにおける規制

ブラジルにおいても、賭博行為は禁止されているが、例外として、許認可を受けた競馬や賭けた時点の倍率で払い戻される固定オッズでの第三者によるスポーツベッティングは適法である。そのため、ブラジルにおいて、固定オッズによるスポーツベッティング事業は拡大している。eスポーツへのベッティングについては議論があるものの、スポーツと同様に考えた場合には、固定オッズでのベッティングは適法となると考えられる。

なお、賭博行為がブラジル国外で行われる場合にはブラジル法の適用はない。ブラジル国外の会社が提供しているオンライン賭博サービスの賭博該当性はいまだ裁判例がないが、今後議論される可能性がある。

5. ブラジル法と日本法との比較まとめ

eスポーツに関するビジネスの観点でブラジル法と日本法の規制を比較すると以下ようになる。

	日本	ブラジル
賞金付き大会への参加	参加費が賞金の原資となっている場合には賭博に該当する可能性が高い。	eスポーツの賭博該当性についてはあまり議論がされていない。ポーカーについては見解が分かっている。
eスポーツ大会の主催	各種の規制がある。	規制はない。
スポーツベッティング	賭博に該当する。	賭博に該当する。ただし、固定オッズの場合は適法となる。

6. ブラジルにおけるeスポーツに関する 法整備について

数年前からeスポーツに関する法整備についての議論が行われているため、今後eスポーツ大会の主催やeスポーツへのベッティングなどに関して規制がかかる可能性がある。そのため、今後eスポーツに関する事業を行うに際しては最新の法令の状況を確認すべきである。

ブラジルにおける 税制改正動向



マルクス・ヴィニシウス・
ゴンザレス
(KPMG サンパウロ事務所
タックスパートナー)



三上智大
(KPMG サンパウロ事務所
マネージャー)



天野義仁
(KPMG ジャパン
南米統括責任者)

世界で最も複雑な税制を持つブラジルの税制は、ブラジル政府自身の公式データによると、ブラジル国内総生産(GDP)に対して32.5%に相当する租税負担がある。生産部門においては、当該税制はブラジル国内企業、特に産業の競争力を阻害する最も有害な要因の1つとしている。

役所業務の削減、簡素化、すべてのセクター間における徴税の平等性、3つのレベルの政府(連邦、州、地方自治体)が立法し社会から税金を徴収するシステムの調和は、ブラジル人の長年の期待である。しかし、多くの人々が切望してきた税制改正は、1988年に連邦憲法が公布されて以来、33年間も先送りされてきた。この間、様々な税制改正プロジェクトが提示されてきたが、良好なビジネス環境の整備、投資額の増加、持続的な経済成長をもたらすような税制を社会に提供するという点では、場当たりの些細な変更でしかなかった。

直近の税制改正動向

任期が2019年1月から2022年12月までの現大統領政権と議会は、最終的に税制改正を行うという強い決意を示している。この点に関して連邦下院から憲法改正案「PEC45/2019」、連邦上院から憲法改正案「PEC110/2019」、連邦政府から「法案3887/2020」及び「法案2337/2021」と、4つの議案が提示されている。ただし、ブラジルで憲法改正案を可決するには、上下両院でそれぞれ2回の投票と、全議員の5分の3の定数による多数決が必要となるため、「PEC45/2019」及び「PEC110/2019」議案の可決については政治的に困難を要する。

また、COVID-19対策のための政府支出は、ブラジルがパンデミックに突入した時点で連邦政府及び地方自治体並びに各州政府においてキャッシュ・フロー及び予算がすでに大幅な赤字になっていたことを考慮すると、深刻な財政圧迫をもたらした。加えて、前述の議案への投票を困難にする要因として、2022年にはブラジル大統領、連邦上院議員、連邦下院議員、州知事、州議会議員の選挙があり、選挙戦に集中することで、立法議案の成立が妨げられることが挙げられる。

このような状況の中、2021年中に承認される可能性が高い議案は、連邦政府が提案した「法案3887/2020」及び「法案2337/2021」の議案である。そこで今回は、この2つの議案を中心に紹介する。

「法案3887/2020」

税制改正の第一段階として、PIS及びCOFINSを統合し、財及びサービスに対する社会負担金(CBS税)の創設が提唱され、2020年7月21日に法案3887/2020が下院に提出

されている。

提案されているCBS税12%の税率については、企業と連邦政府の間で意見が分かれており、民間企業によれば、この税率は、現在のPIS及びCOFINSの合算税率に対して増税になることを主張している。サンパウロ州産業連盟(FIESP)の調査によると、損益分岐点は8%になるだろうとのことである。この問題は、税負担の増加を抑えたいとの経済省の公約に基づき議論がなされている。

「法案2337/2021」

税制改革の第2段階として、個人、企業、投資に対する所得税の変更が提唱され、2021年6月25日に法案2337/2021が下院に提出されている。この法案が下院議会で審議されている間に提出された7月13日の修正案についても考慮した上で、主な変更点を以下に列挙する。

個人については、個人所得税の非課税枠が現在の月給1,903.98レアルから2,500.01レアルに引き上げられる。現在、月給4,664.68レアル以上の人に適用されている個人所得税の最高税率27.5%は、月給5,300.01レアル以上の人にのみ適用される。また、配当金に対する課税については、これまでは所得税が免除されていたが、今後は20%の源泉徴収税が課せられる(マイクロ企業(ME)及び小規模企業(EPP)への投資の場合、毎月2万レアルを限度とした非課税枠を設ける)。

企業については、法人税(IRPJ)の税率が変更され、現行の15%から2022年には5%、2023年には2.5%に引き下げられる。利子配当金(JCP)については、現在は損金算入が認められているが、2021年12月31日までに支払われた利息についてのみ控除可能となり、2022年1月以降は控除が認められなくなる。また、書籍、雑誌、紙、必需的な食品、肥料及び農薬、航空機及び船舶製造など、いくつかの製品については、II税及びIPI税の優遇措置が廃止される。IRPJ及び社会負担金(CSL)の税金計算は、四半期毎の計算が義務化されるようになる。

提案の細分化、パンデミック、財政赤字、政治的シナリオは、短期的には、連邦、州、地方自治体の主要な税金を単一の付加価値税に置き換えるという理想的なモデルを成立させることを非常に困難にしている。実際に、ブラジルの税制は複雑な構造になっており、議会、政府等複数のレベルでの承認が必要で、法案の原文が何度も変更される可能性がある。このような法的枠組みの構造変化が不利な条件にある中、ブラジル政府は税制改正の実現に向けて努力しており、その税制改正の影響はビジネス環境にプラスになると期待したいところである。

ブラジルの歯科(その2)



星 淳子
(H&A コンサルティング代表)

ブラジルの歯科大

日本の歯科大学は一律6年制だが、ブラジルでは4年または5年と大学により在学期間は若干異なるが、総じて日本よりも短い。しかし学ぶ内容は日本もブラジルも同じレベルであるため、相当な詰め込み方式と言える。その結果、卒業に要する平均年数は5年となっており、4年間で卒業することはかなり難しい。

国家試験はなく、大学卒業と同時に歯科医師免許を取得することになる。ブラジルの歯科医数はアメリカに続く世界第2位と多く、その水準は一般的に高いと評価されている^(注1)。また多くの歯科医院は大都市が集まるブラジルの南東部に所在している。

卒業後に晴れて歯科医として活躍するわけだが、医師免許の取得前から、大学に設置されているクリニックで、大学の監督の下、学生が治療を必要とする国民に、無料または低金額で治療を行うこともある。貧困層にも平等に医療を提供したいとの思いによるものだが、患者の中には薬ではない暮らしの中にあっても、手作りのお菓子やプレゼントを持参する者もいる(これは、医者との信頼関係の証でもある)。このように示される感謝の気持ちが嬉しく、歯科医師を目指す気持ちが高ぶったことや、患者の愛らしい笑顔を今でも鮮明に覚えている。大学のクリニック以外でも、サンパウロ市内にある大学ボランティアグループ ABEUNI (<https://www.abeuni.org.br/abeuni/>) に所属し、貧しい人々に治療を施す活動にも従事した。週末に地方へ行き、現地の貧しい人々に簡単な治療やセミナーを行うもので、皆が笑顔で迎えてくれた。充実した活動の中、多くの経験を積むことが出来たが、貧困というブラジルが抱える現実を肌で感じる貴重な経験にもなった。

広大なブラジルでは、未だに読み書きが出来ない人が多く、大学卒の割合は18%にも満たない(IBGE2019年)。日本の大卒の割合が20代、30代世代で50%を越すという中で、この数字を見ると、その少なさに驚愕する。

この識字率の低さや教育の不徹底が、ブラジルの格差問題、



▲読み書きができない人の割合(15歳以上)

貧困問題に横たわる根源的な原因との認識も、現場で治療を続ける中で持つようになった。

ちなみに、ブラジルの歯科大学を卒業後、日本の歯科大学に留学した訳だが、ブラジル国内で、現場経験を積んでいたため、日本でも患者への接し方に不自由は感じなかった。ただし、当時はまだ漢字の読み書きが十分に出来なかったため、カルテの記述には相当苦勞した記憶がある。そんな時も、患者の笑顔が、何よりの支えであった。

美容も歯科クリニックで

ブラジルへ行くと、年齢に関係なく歯科矯正をしている人を多く見かける(今では様々な矯正方法あり、見た目も様々)。人によっては、幼い頃に歯の矯正をしたにもかかわらず、さらに美しい歯並びを目指し、大人になってから再度矯正するような人も(実は私もそのひとり)。また日本ではさほど見かけない、いや見たことがない中高年の歯矯正も珍しくない。ブラジル国内でも歯の矯正は安くはないが、高額でも矯正する人は依然として多い。矯正は高額であるが故に、矯正していることが、一種の社会的ステータスを表すものだと認識も存在する。インターネットの普及によりブラケット(矯正器具の一種)の購入が容易になったが、自分で購入し矯正を試みる、もしくは器具を装着することで、社会的ステータスを演じる、といった人もいようだ。このように口元をいかに良く見せるか、というあくなき欲求は続く訳だが、ブラジルで歯科医が対応する美は、歯に限ったことではない。ボトックスやヒアルロン酸の注射を施す歯科医も珍しくない。特にほうれい線は口元だから、歯科医の得意分野かもしれない。

痛みに弱い国民

ブラジル人は痛みに弱い。日本人も歯科治療における痛みに恐怖を感じる人は少なくないが、ブラジル人の恐怖心は日本人の比ではない。日本人は、我慢強く困難にも耐え抜く気質との印象があり、時にそれが美しいとも思えるが、ブラジル人は、耐えることを美としない。余りの恐怖のため、麻酔は当然として、経口鎮静薬(口から眠らせる薬を服用)を選択する患者も多くいる。また痛みに対する恐怖は、今後の治療継続にも大きく影響することから、歯科医は恐怖心を根付かせないように、麻酔の効果に細心の注意を払う。ちなみに、胃カメラや大腸検査を、鎮静薬を使わず受検する日本人が多いと話す「信じられない」「nem morta(死んでも嫌だ)」と、答えるブラジル人は少なくない。



オリンピックのボランティアしてきました!

池 聡子
(ポルトガル語通訳案内士)

コロナが収束しない中での東京オリンピック。ポルトガル語サポートとしてボランティアに登録したが、本当に実現するのかがずっと半信半疑だった。でも、ユニフォーム受領、研修、ワクチン接種と進み、モチベーションが上がってきた。開会式をTVで楽しみ、さあ活動開始!

言語サポートは本来なら外国人観光客への案内通訳等も含まれたが、無観客になってしまい、試合直後のマスコミの簡単なインタビューの通訳等が主な仕事となった。海外ボランティアも来日不可となり、メンバーは留学生等の在日外国人や日本人で構成されていた。

私の所属はハンドボールの代々木国立競技場。男女それぞれ12枠が2グループに分かれ、総当たり戦の予選後、8強による決勝戦でのトーナメント方式でメダルが決まる。今回、日本は男女とも開催国枠での参加。約2/3は欧州の国で実際強い。その中でブラジルは男女チームとも出場し頑張っていた。

残念ながら予選最後の試合で男子はドイツに、女子はフランスに負け、予選敗退。女子の方はフランスも負ければ決勝進出が危うかったため、両チームとも必死だった。(その後、フランスは男女とも金メダルを取る。)

ブラジルチームの姫御肌のゴールキーパーが、試合終了後涙

した姿は今でも忘れられない。

他に男子はポルトガル、女子はアンゴラチームが参加していたが、全部予選敗退してしまい、これで私の役目も終了と思っていたら、その後、サッカーのブラジル対メキシコ準決勝戦とボクシングのメダルセレモニーで声がかかった。

サッカーのブラジル代表選手を間近で見られたことも光栄だったが、ボクシング・ミドル級のエベルト・ソウザ選手の決勝戦の印象が深い。最終ラウンドまで判定負けしていたが、残り僅かでそれをKOで逆転。相手は優勝候補筆頭だっただけに、決着が付いた時の同選手の喜びはどんなに大きかったことか。しかし、リングを降りたソウザ選手は意外と優しく明るい青年。メダルセレモニーの前に、まだ頭を切り替えられない銀メダル選手の重い雰囲気明るくしようと、英語で銀・銅の選手らに積極的に話しかけ、場を和ませていた。

今回の体験は予想以上に貴重で、学ぶことも多かった。メンバーの中には、もう3年後のパリ五輪を目指している人もいる。今回、国内外の選手達から沢山の賛辞をもらった日本のボランティアがパリ五輪に「おもてなしの精神」を届けてくれることを期待している。

ジャーナリストの旅路

犯罪は国を映す?

中川千歳
(共同通信サンパウロ支局長)

夕刻のパウリスタ大通りを歩いていたら、耳をつんざくような女性の叫び声が聞こえた。目を向けると、反対側の歩道で女性が半狂乱になって何者かを追いかけている。フードデリバリーのボックスを背負い自転車に乗った男のようだ。「私の携帯電話」と叫んでいるのでスマートフォンをひたたくられたのだろう。

必死の女性は車道に飛び出しひかれそうになりながらも走る。だがついにはあきらめたのか、泣きじゃくりながら交番に向かった。

メディアでよく報じられている携帯電話のひたたくりだ。被害者の悲嘆ぶりに、こちらもすっかり落ち込んでしまった。ショックだったのは逃げる男の周りに多くの人がいたのに、誰も何もなかったことだ。日本だったら義侠心から行動を起こす人がいるのではないかと思ったが、それはあまりにも危険なのだろう。

昨年8月終わりにブラジル・サンパウロに赴任した。着任早々、猛スピードで逃げる自転車の男と銃を構えて追いかける警官を間近に見て「ここはブラジルだ」との思いを強くし、日本で「平和ぼけ。していた頭を切り替えねば、と戒めた。

ショックが大きかった冒頭の事件から数カ月後、またして

もほぼ同じ場所で携帯電話ひたたくりを目撃した。今度の被害者は男性。道の反対側に警官もいたが、一瞬追いかけるそぶりを見せてすぐにあきらめていた。

恐ろしいのは前回ほどショックを受けず「またか」と感じていた自分の心の変化だ。格差が大きく犯罪が頻発するブラジルでは自分も「犯罪慣れ、してしまうのか。被害者になるのはごめん被りたいが。

これまでに海外はアメリカ・ロサンゼルスとイランに勤務した。どちらも治安はそれほど悪くなかったと思うが、ロシアでは銃社会を反映してか、住んでいた集合住宅でも2度の銃撃事件があった。2度とも海外出張中で難を逃れた。

イランで身近な犯罪は痴漢だった。厳格なイスラム教の戒律が適用され、女性は異教徒の外国人でもスカーフで髪を隠すのが義務。肌や体の線を出す服装はご法度だった。自由恋愛が表向きは禁止され、未婚の男女が公共の場で一緒にいると風紀警察の取り締まり対象になりかねなかった。

そんな環境だから欲求不満の男性が多かったのか。何度か被害に遭ったし、周りにも被害者は多かった。犯罪は社会の映し鏡だ。実情を知り、自衛を怠らないようにしたい。

保久原ジョージの話題作『星をかぞえる』と沖縄移民史 人種問題を内包した「勝ち負け抗争」を問う

岸和田仁 (『ブラジル特報』編集人)

「勝ち組負け組抗争」をごく要約的に

ヴァルガス政権による外国語学校の全面的閉鎖(1938年)、邦字新聞の強制停刊(1941年)などが強行されたことで、日本語情報が途絶した日系社会では不安・動揺が広がったところ次第に第二次大戦が勃発した。

日系移民の多くはポルトガル語の新聞報道内容を理解できるはずもなく、そんなところに敗戦のニュースが来たところで、そのファクトを受容できたのは、一部の知識層でしかなかった。移民の多くは、「日本は戦争に勝利した」とのフェイクニュースを信じてしまうこととなり、この戦勝派(勝ち組)の組織「臣道聯盟」が1945年7月に創設されるや、45年末には加盟者数2万以上(家族を含めると13万)となった。

こうした事態に対し、認識派(負け組)による「時局認識運動」が45年10月から始められるが、これがかえって反発を醸成し、46年から47年にかけて「勝ち組」過激派による「負け組」へのテロ襲撃が繰り返される。『ブラジル日本移民八十年史』によれば、総計で暗殺23名、襲撃傷害86名、という悲惨な結果となった。この事件は、長い間日系社会にとってトラウマとなったのである。

モライス『汚れた心』(初版2000年)のインパクト

この「勝ち組負け組抗争」については、長い間、「勝ち組」の狂信的テロリストに全面的に非がある、と語られてきた。これは戦後の日系社会をリードした「負け組」インテリ層が、移民史の正史を編纂・記述してきたからであり、「勝ち組」運動を社会人類学者らがニュートラルな視点から再考察するようになるのは1980年代以降に過ぎない。

一般のブラジル読書界にこの事件が改めて知られるようになったのは、作家フェルナンド・モライスの著書『Corações Sujos(汚れた心)』(初版2000年)のおかげ、とあってよい。同書は、「勝ち組」=「臣道聯盟」=「狂信的テロリスト」という通俗的理解を活劇タッチで描いたため、ベストセラーとなってブラジル一般社会にも日系社会にも大きなインパクトを与えたのだ。この作品は、ドキュメンタリーの叙述としては優れたものであったが、事件の社会的背景まで掘り下げた叙述はない、という致命的な欠点があった。(この作品は映画化され、伊原剛志、常盤貴子、奥田瑛二も熟演したが、ハリウッド風ドラマに転化しており、事件の実相をこの映画から学ぶことはできない、という失敗作であった。)

「勝ち組」子息層からの反論

モライス作品への反発から、「勝ち組」の子息にあたる日系二世層からの反論著作がいくつも刊行されたが、その代表的作品

が、今回の弊誌特集記事(P6-7)を寄稿していただいたJorge Okubaro(保久原ジョージ)氏の「O súdito (Banzai, Massateru!)」(初版2008年)であった。

このタイトルの直訳は「臣下(バンザイ 正輝!)」となるが、この和訳を行った中田みちよさん(ブラジル日系文学学会前会長)は、「当時の一攫千金を夢見た移民たちの気持ちをなぞらえたつもりで、『星をかぞえる』という題名を選んだ由だ。

ブラジル日系文学誌52号(2016年8月刊)への寄稿文のなかで、保久原氏は、「私の父は臣道聯盟の一員だったが、どんな瞬間であれ、意見が対立したからといって同胞の殺人に加担するなど、ありえない。(中略)この事件はモライスの本で扱われているような単純なものではない。いまだかつてない歴史的事実として、そして人種問題を内包する事件として精査されるべきものでなければならない。」と述べているが、同氏は、関連文献を読み込み、州立文書館や新聞社で保管されている政治警察関連資料や臣道聯盟の裁判記録資料も詳しく調査し、さらには沖縄や日本の歴史や宗教に関する専門書も熟読、並行して家族を含む関係者に取材を重ねたのだ。その成果がこの話題作となった。沖縄出身の一移民のブラジルにおける辛酸の日々を小説タッチで文章化した作品だが、随所に、沖縄・日本・ブラジルそれぞれの歴史的背景についても詳しく書き込まれている。

『星をかぞえる』の超あらすじ

この544頁もの移民物語の主人公は、保久原正輝、著者の父親だ。彼がサントス港に着いたのは1918年7月、まだ13歳で、叔父夫婦の構成家族の一員であった。多くの日系移民と同様、サンパウロ州内陸部のコーヒー耕地で働きながら国粋主義教育を受けた正輝は、敗戦を受入れることは出来ず、積極的に「臣道聯盟」に参加したが、後に警察に検挙され、裁判を受けることに。ようやく敗戦を認識することになるや、出稼ぎ意識を捨て、ブラジル永住を決意する。さらに悩んだ末、教育方針も現地主義に変更、家庭内での会話はポルトガル語とした。

終章は、ブラジル式教育を受けた長男(6人兄弟の末っ子の著者には長兄)が予備役軍人となって、拜刀式で軍人の魂である短刀を受けるシーンが語られる。

一言でいえば、時代と環境の大嵐に揉まれて成長と挫折を繰り返す主人公の苦悩が巧緻な筆致で描かれているノンフィクション作品である。

この労作の和訳は、中田みちよ・古川恵子共訳で、「ブラジル日系文学」誌(59号から67号まで)並びに「ニッケイ新聞」(2018年12月から1年間)に連載されたが、日本での出版を切望するものである。



▲保久原ジョージ著『星をかぞえる』表紙

●上半期の鉱工業部門生産

IBGE(地理統計院)の発表によれば、今年上半期の鉱工業生産は前年同期比で12.9%の二けた増加となった。セクター別では、自動車セクターは前年同期比56.9%増、機械・装置セクターは、前年同期比41.5%増となっている。(8月3日付けエスタード紙)

●環境

国立宇宙研究所(Inpe)によると、本年6月、アマゾンの2,308地点において森林火災が確認された。これは、6月の数字としては2007年6月3,519地点以降最大であり、昨年6月(2,248地点)との比較でも3%増えたことになる。尚、過去最高は2004年6月の9,179地点。(7月2日付フォーリャ・デ・サンパウロ)

●世論調査

Genial/Quaest社が7月1日から4日にかけて1500人を対象に実施した世論調査によると、大統領候補の支持率及びボルソナロ政権に対する評価は以下の通り。

◆大統領選第1回投票:ルーラ(PT)43%、ボルソナロ(無所属)28%、シロ・ゴメス(PDT)10%、ドリア(PSDB)7%、マンデッタ(DEM)6%、レイチ・リオグランデ・ド・スール州知事(PSDB)4%、パシエコ上院議長(DEM)3%、

ジェレイサッチ上院議員(PSDB)3%。

ルーラとボルソナロの潜在力:ルーラに「絶対に投票する」36%+「投票するかもしれない」20%=56%。ボルソナロに「絶対に投票する」22%+「投票するかもしれない」15%=36%。

「第三の候補」の潜在力:「ルーラの当選が望ましい」41%、「ボルソナロの再選が望ましい」24%、「ルーラとボルソナロ以外の候補の当選が望ましい」31%。

拒否率(この候補には絶対に投票しない):ルーラ42%、シロ・ゴメス58%、ボルソナロ61%。

◆決選投票:ルーラ54%対ボルソナロ33%。シロ・ゴメス44%対ボルソナロ36%。ボルソナロ38%対ドリア38%。マンデッタ37%対ボルソナロ36%。レイチ38%対ボルソナロ33%。ボルソナロ39%対パシエコ31%。

◆ボルソナロ大統領の支持率:支持29%、不支持67%

◆政府支持率:支持41%、不支持57%

◆ボルソナロ政権に対する評価:「ポジティブ」26%(非常に良い8%+良い18%)、「ネガティブ」44%(悪い10%+非常に悪い34%)、「普通」28%(「普通+」15%、「普通-」13%)。

(7月7日付ヴァローラ・エコノミコ電子版)

キャンパス・コラム

私はホストファザーが文字を読めないことを知った

新井竜斗
(上智大学1年)

私は2018年から2019年にかけてブラジル北東部のリオグランデ・ド・ノルテ州にある小さな町に1年間高校留学をしていた。ブラジルに着いた当初、私は全くと言っていいほどポルトガル語が話せなかった。そのため現地の人々とスマートフォンのGoogle翻訳を使いながら会話をしてきた。ホストマザーとホストファザーはポルトガル語ができない私に教えてくれ、私たちはすぐに打ち解けることができた。しかし、そこにホストファザーの姿はなく、私は彼に対し「なんだ、冷たい人だなあ」と少し距離間を感じていた。そして留学が5か月経ち、ブラジル生活にも慣れ、ポルトガル語もある程度話せるようになったある日、ホストファザーは私に日本の文化について尋ねてきた。私はインターネットを使い、資料を見せながら説明したが、彼は分からないといった表情をした。するとそれを見ていたホストファザーが私に「私の父は文字が読めません」と言った。私は驚きが隠せなかった。私はその時初めて、教育というものが当たり前ではないことを知った。

私たちの住む日本には義務教育の制度の中、年齢や生活環境に関わらず、人々はみな当然のように読み書きができる。私は今までそれが常識だと疑ってこなかった。しかし、その常識は一步外に出てみれば常識ではない。実際にブラジルにはホスト

ファザーだけでなく、文字の読み書きができず、計算もできない人がたくさんいた。

私は自分がいかにブラジルの現状に無知であるかを知ると同時に、読み書きはできなくともそのことを恥と覚えていない彼らの姿に感動した。彼らは、教育を受けていなくとも、自分の知恵を使い、一生懸命日々を生活している。そしてそれぞれがその生き方に自信を持っていた。そうすることが今の社会に必要なことだと私は思う。私はブラジルだけでなく他の国や地域の実情に対してももっと知っていきたい。そして教育を受けられることを当然と思うのではなく、それらが当たり前ではないことをもっと日本人々に知ってもらいたい。

私は今、日本の大学生として、ポルトガル語を専攻している。自分が経験したブラジルへの留学という強みを少しでも活かせると思ったからである。また私自身が、教育を受け、読み書きができていくことへの感謝と、教育を通して享受したその財産を自分が今できる方法で他者に還元したいという思いがある。自分の経験を糧に繋がった輪をさらに広げ、自分が見て、感じたブラジルの姿、また日本の良さを人々に発信することが今の私の使命、そしてお世話になったブラジルへの恩返しであると感じている。

▲モライス著『汚れた心』表紙

新刊書紹介



◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆

『比較教育学研究 62』 (日本比較教育学会編)

「コロナ禍における世界の学校教育」特集号だが、米国、南アフリカ、スウェーデンなどの事例報告に次いで、田村徳子准教授（京都先端科学大学）の論稿「コロナ禍におけるブラジルの学校教育」が、2021年初頭の時点でのブラジル教育現場のコロナ対応の現状と課題点を論述している。また同氏の著書『ブラジルの校長直接選挙』に関する書評（斎藤泰雄氏担当）も収録されており、ブラジルに関心のある一般読者にも、一読を薦めたい。

(東信堂 2021年2月 212頁 1,800円+税)

『移民研究年報 第27号』 (日本移民学会編集委員会編)

日本移民学会の年報 No.27 に収録されている論文は3本、研究ノートは1本、あとは書評7本、新刊紹介8本

のみ。研究ノート「20世紀前半のカリフォルニア州のユダヤ人と日系人」はこれまで見過ごされていたファクトを丁寧に「発掘」していて興味深い。佐々木剛二著『移民と徳一日系ブラジル知識人の歴史民族誌』並びに根川幸男著『移民がつくった街—サンパウロ東洋街』の書評も、それぞれ専門家らしい深読みコメントとなっている。

(明石書店 2021年6月 92頁 3,000円+税)

『高地文明』(山本紀夫著)

四地域の熱帯高地（①南米アンデス、②中米メキシコ、③アジアのヒマラヤ・チベット、④アフリカのエチオピア）はいずれも多くの栽培植物の発祥地であるが、地理学者・人類学者として長年にわたり現地調査を行った著者は、『ジャガイモとインカ帝国』などの著作を発表してきた。その「高地文明」の仮説をより深め、「もう一つの四大文明」と論じたのが本書である。実に刺激的にして説得力ある「四大」文明論であり、ブラジル関係者にもお薦めだ。

(中央公論新書 2021年6月 324頁 1,050円+税)

『新版 コーヒー美味手帖』

こだわりのコーヒー専門店三社（「カフェ・バッハ」、「堀口珈琲」、「丸山珈

琲」）が教えてくれるコーヒーの果てなき奥深さ。パート2の「シングルオリジンコーヒー図鑑」には世界各地の差別化コーヒーの情報が満載。ブラジルからはミナスジェライス自然派農園が登場している。それぞれの豆の品種、精選方式（自然乾燥式か水洗式か）などスペシャルティコーヒーのこだわり情報を、コーヒーを飲みながら眺めては如何。なんと面白く、刺激的だ。

(世界文化社 2021年6月 224頁 1,400円+税)

『甘さと権力 砂糖が語る近代』 (シドニー・ミンツ著、川北稔訳)

「コーヒーと砂糖がヨーロッパ人の幸福にとって不可欠か否かは知らない。しかし、この二つの生産物が世界の二つの広大な地域に不幸をもたらしたとだけは確実。すなわち、アメリカでは、これらの植物を栽培する土地を求めて、人びとが追い払われた。」この17世紀の作家サン・ピエールの名言を引用しながら、ミンツ教授は主にカリブにおけるサトウキビ栽培がもたらした功罪の歴史を叙述していく。歴史人類学の古典的名著が文庫になった。

(ちくま学芸文庫 2021年5月 527頁 1,500円+税)

!!「ブラジルあれこれ」!!

▼パウロ・シャーベス



前回、ベレンの都市計画に取り組んだ建築家で、3月に亡くなったパウロ・シャーベスの作品としてエスタソン・ダス・ドカス (Estação das Docas) とバルケ・ダ・レジデンス (Parque da Residência) を紹介した。彼の作品は、ほかにも街中に多数が点在し、いずれも「市民がベレンの歴史や自然を知る機会を提供し、ベレン市民であることに自信と誇りを持つような作品」というコンセプトを具体化する魅力溢れるモニュメントとなっている。

フォルチ・ド・プレゼピオ要塞 (Forte do Presépio)、州博物館 (Museu do Estado)、アルテ・サクラ美術館 (Museu de Arte Sacra)、カザ・ダス・オンゼ・ジャンラス文化スペース (Espaço Cultural Casa das Onze Janelas)、フェリス・ルジタニア歴史建造物群 (Complexo Feliz Lusitânia)、宝石美術館 (Polo Joalheiro São José Liberto)、マンガル・ダス・ガルサス (Mangal das Garças)、Hangar コンベンション・センター (Hangar Centro de Convenções) などである。宝石美術館は、元刑務所を改修、現代的な美術館として蘇らせたもの。また、マンガル・ダス・ガルサスは、河岸の整備事業の一環として海軍工廠に隣接する湿地を自然公園として整備したもので、その工前の通りサギ類 (garças) の棲み処となっている。また、貴重な河畔のマングローブや蝶の生態を観察できる施設などのほか、郷土料理やアマゾン・フルーツも提供するレス

パウロ・シャーベス(2)

トラン Manjar das garças を併設し、市民の憩いの場を提供している。

最近のパウロ・シャーベスは、ウチンガ州立環境公園 (o Parque Estadual do Utinga) の再建に多くの努力を傾けていた。ベレン市の中心部から数キロの距離にある面積 1393ヘクタールに及ぶ、世界的にも珍しい都市圏にある広大な自然公園で、ベレン市の水道の取水地域の保全と広大な自然環境の保護、環境教育やトレッキングなどのレジャー活動に関連する施設を市民に提供することを目的としている。1993年の開園以来、遊歩道や関連設備が老朽化し、閉園に追い込まれていたところ、パウロ・シャーベスのデザインによる新しい公園施設に州政府が予算を投入し、2017年の再開園にこぎつけた。同人が日本からの来訪者を前に「日本の水族館で使用されている大型アクリルガラスを使ってアマゾン河の魚類の生態を展示する水族館を作りたい。」と熱心に話っていたのを思い出す。(続く) (MK)



▲ウチンガ州立環境公園
▲宝石美術館
マンガル・ダス・ガルサス▶



Churrascaria
Que Bom!
www.que-bom.com

Produzido pela
ATHLETA®

LOJA ASAKUSA
TEL: 03-5826-1538
TOKYO-TO TAITO-KU
NISHI ASAKUSA 2-15-13 Nikkoshi B1F

LOJA SHIMBASHI
TEL: 03-6402-5685
TOKYO-TO MINATO-KU
SHIMBASHI 4-1-1 SHINTORA CORE 2F

日本ブラジル中央協会

法人・個人・学生 新規会員募集中

会員数 法人会員 104社 個人会員 約470名 (2021年8月現在)

当協会の活動目的「日本・ブラジル両国間の相互理解、友好関係の促進に寄与する」に賛同・ご支援頂ける方に、会員となることをご検討いただければ幸いです。

会員特典

1. 協会会報「ブラジル特報」の無料配布
隔月発行、年6回配布。
2. 会員価格にて、講演会等のイベント、ポルトガル語講座に参加できます (会員限定イベントへも参加いただけます)
3. 会員交流懇親会へ参加いただけます
4. ホームページにて、会員限定情報をご覧いただけます

年会費

※入会金は不要です

法人会員 1口 20,000円 / 個人会員 1口 10,000円
(2口以上) (1口以上)

お申し込み



《日本ブラジル中央協会公式HP》
https://www.nipo-brasil.org

日本ブラジル中央協会 検索

イベントのご案内

■ 舩方周一郎 東京外国語大学講師 オンライン講演会 演題：ブラジルにおけるコロナ禍の政治危機と米中対立下での外交戦略

日時：2021年9月3日(金) 10:00 ~ 11:30 <日本時間>
開催方式：zoom ウェビナー
参加費：[会員] 無料 (法人会員の在ブラジル子会社の駐在員も含む)
[非会員] 1,000円

ブラジルでは新型コロナの蔓延もあり、反ポルソナ口政権の動きが活発化しています。この危機的な政治状況下のブラジルに関し、舩方東大講師にブラジル政治、そして外交戦略等につき語って頂きます。

■ 桑名良輔 在サンパウロ総領事 オンライン講演会 演題：最新のブラジル情勢 (仮題)

日時：2021年9月22日(水) 10:00 ~ 11:30 <日本時間>
開催方式：zoom ウェビナー
参加費：[会員] 無料 (法人会員の在ブラジル子会社の駐在員も含む)
[非会員] 1,000円

好調な農業部門と回復傾向を見せる工業部門により、今年度のブラジルのGDP成長率は5%以上と予想されています。昨年8月にサンパウロに赴任された桑名総領事に、ブラジルの最新情勢について、最近のコロナ情勢の他、環境政策や民営化等各種改革、OECD加盟、メルコスル、FTA締結状況、更には大統領選に向けた最近の状況等、サンパウロから、講演頂きます。

■ ブラジル 駐在員夫人のための渡航前オンラインセミナー

日時：2021年9月25日(土) 9:30 ~ 12:00 頃
開催方式：zoom
参加費：会員企業の駐在員の配偶者 2,000円
非会員 3,000円
(夫婦で参加の場合は、+1,000円)

講師：伊藤 智晴 (元丸紅駐在員夫人)
山口 セシリア (在サンパウロ、長年サンパウロで日本企業に勤務)
高嶋 協会理事 (元住友商事、在ブラジル21年)
原島 課長 (日本通運)

「ブラジル特報」は一部有名書店の店頭でも入手できます。



一皿から
ピースフルネスを



茶道裏千家 HP: www.urasenke.or.jp



裏千家ブラジル出張所 HP: www.chadourasenke.org.br



7/7 NEW OPEN ラ・グランド・メゾン ヒロユキサカイ

La Grande Maison HiroyukiSAKAI

L'inspiration culinaire
de Seiji WATANABE

Bienvenue dans mon univers culinaire !
Les associations de saveurs, la puissance des goûts,
la délicatesse de l'expression caractérisent mes créations.
Je vous invite à une promenade au fil de mes rencontres,
intuitions et inspirations.



La Grande Maison HiroyukiSAKAI

東京都渋谷区神宮前1-4-20

パークコート神宮前1F

TEL 03-6721-0852

<https://www.grande-maison.jp/>

水曜～月曜 ランチタイム12時～13時30分LO

ディナータイム18時～20時LO

(ディナータイムご利用はメンバー予約のみとなります)

■ブラジル特報 ご優待特典 ■ 11月未迄
コース料理 ¥9,200→ ¥7,150【優待コード B R-0901】
御予約の際、優待コードをお伝えください。
WEB 予約の際にはメッセージ欄に優待コードを記載願います。

「料理の鉄人」での最強鉄人など、日本の
フランス料理界をリードしてきた坂井宏行が
自らの名前を冠し「料理人生の集大成」と
位置付けた店を7月7日にオープン



ブラジル赴任の前に ビジネスで使えるポルトガル語を

ブラジルでビジネスや生活をする上で
欠かせないのがポルトガル語です。
BrAsia(ブレイジア)では、
赴任前と赴任後の語学研修を提供します。
「講師任せにはしない」
現地に精通したスタッフが進捗を管理します。



Be Sustainable!

シトロスッコ社は
フェアトレードオレンジ果汁を通じて
家族経営農家を支援しています。



日本フルーツジュース株式会社
新住所 〒100-0006 東京都千代田区有楽町1-7-1
有楽町電気ビル南館10階
Tel: 03-6453-6733 Email: sales@nfj.co.jp

www.citrosuco.com.br

BrAsia (ブレイジア) 運営: 株式会社 漢和塾 〒104-0061 東京都中央区銀座1-14-12 楠本第17ビル5階
TEL03-6263-0716

お問い合わせは E-mail: brasia@kanwajuku.com HP: <http://brasia-j.com/>

360° business innovation.



世界の未来を、ブラジルとつくる。

[Business innovation-1]

鉄道と港湾を一体化させ、物流を効率化。

鉄道網と港湾ターミナルの複合一貫サービスを提供するVLI社に出資参画。
たとえばサントス北西のティプラム港で、取扱貨物を次々と拡大。

[Business innovation-2]

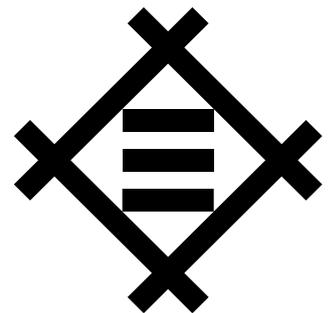
貨車リースで、全土に広がる陸上輸送モデルを確立。

MRCLA社を通じてリース事業を展開。貨車6,000両以上、機関車20両以上で国じゅうを縦横につなぎ、穀物・肥料・鉄鋼製品・燃料などを運搬。物流の安定化に貢献。

[Business innovation-3]

現場のニーズに細やかに応える農薬事業で、農業の発展を。

オウロフィーノ社に出資参画。大規模な農地が多いブラジルで、
気候条件に適した農薬製剤を開発。作物の順調な生育を農薬で支え、
増産や品質向上に貢献。



世界の未来を、世界とつくる。三井物産

MITSUI & CO.